



池味 (イチミ)

池味の自然と今昔

池味は、宮城島の北東部に位置する人口一・五人、五十九世帯（平成二十二年二月末）のうるま市内で一番人口の少ない字である。本島から海中道路を通り、平安座から宮城島に渡り、桃原から迂回するように島を登り、ぬちマースの工場を過ぎて北に下つていくとやがて池味に到達する。集落は池味湾を見下ろすように池味湾を見下ろすように丘陵上に立地している。

池味は主に首里や名護方面からの移住者で形成された宮城の屋取集落であったが、その後、大正五年に宮城から分離した。集落の前方に池味漁港（メインミ）がある。池味漁港は戦前戦後にかけて周辺離島や国頭方面とを結ぶ天然の良港として表玄関の役割をになつていたが、海中道路や伊計大橋などの完成により現在は漁港として利用されるようになった。

池味の夕暮れ時、湾岸に佇んで寄せては返すさざ波の音を聞きながらかつてエンジンの音も高く出船入船で賑わったであろう港に思いをはせると何とも表現しがたい思いにかられる。

戦前の池味の産業について『与那城村立宮城小学校創立九十周年・記念誌』は「戦前は農業が中心でその中でもさとうきびやさつまいもの栽培や畜産が盛んであった。さとうきびは製糖して大部分は売りに出し換金した。さつまいもは、主食や家畜の飼料として主に利用し、時には近隣の離島や国頭に持って行って売った。畜産は豚・山羊を各家で数頭飼い、牛の飼育も多かった。馬も農作業やサトウグルマを引く役に使うため飼われていた。畜産物の牛のすべてと豚・山羊の大部分は島外に売り、残りは自家利用し、豚は旧正月には、殆ど各家庭で一頭屠殺した」と記している。

かつては水が豊かだった池味では米作りも盛んだったようだが現在は殆どがサトウキビ畑に変わり、ところどころに野菜が栽培されている。

池味の語源と意味

池味の地名については、以前から疑問に思っていることがある。通説では「伊計島が見えるから池味になった」と

されているが、とすれば「池見」、あるいは「伊計見」と表記される筈である。沖縄の地名は一般的に当て字が多く、栄野比とか喜屋武のようにその漢字自体意味をもたないが、伊計を指す「池」はともかくとして「味」よりは「見」のほうが漢字も簡単に「伊計が見える」という地名の意味を表す。

では、いつたい池味の意味はどのようなことが考えられるだろうか。まずイケの意味は必ずしも水の溜まっている池のことではなく、古くは湾になっている池のように海水が溜まっているところもイケと表現したようだ。このことから池味の意味は「池のような湾があるところ」という意味も考えられる。宮古島の池間港も池味港と同様な形状をしている。

トゥンナハとアムジ

池味港の後方、北側にトゥンナハビーチがある。この海岸は白い砂浜が続き、夏は海水浴客で賑わいを見せる。ここからは金武湾の向こう側に山原の山々が競うようにその姿を見せる景勝の地でもある。

また、ここは魚群の回遊する海域で「トゥンナハの定置網漁法」として知られている。浜の北東にフカシと呼ばれるところがあり、そこに袋状に網を設

置し、約百五十Mにもおよぶ袖網を設置して金武湾を回遊してきたいろいろな種類の魚を捕獲した。たまにはカマシタやカーミーも入っていたという。

定置網の張られるフカシというところは岸辺ではあるが周囲より水深が深いためそのように呼ばれたか、またここには岩があるが島と岩を海水が吹き抜ける意味でフカシと呼んだか。トゥンナハの意味については次のことが考えられる。

- 一、トゥンは門で網を張る湾の門のところでナハはナバで漁場のこと。「湾の角のところの漁場」の意味か。
- 二、トゥンは、トム・トマリ（泊）で船の停泊地、ナハは同じく漁場のことで「泊の漁場」のことか。

※伊波普猷によれば那覇の語源は「漁場」としている『伊波普猷全集・沖縄考』。

池味と伊計大橋との間にある小字でアムジ（阿武地）と呼ばれるところがある。ここには「アムジガマ」と呼ばれる奥行き百Mほどの洞窟があり、地元信仰の場として崇められ、戦争中は避難洞窟として住民を守った。アムは洞窟を意味するアブの転訛した語で、ジは地で、その意味は「洞窟のあるところ」と解される。